平成30年度　園長だより NO.48【H30.11.14】

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（ 文責／園長 石川照代 ）

附幼伝統の「サファリごっこ」

年長さんは、今「サファリごっこ」の真っ最中。この日も、できあがった動物たちを園庭に出して、グループごとにお客になったり飼育員になったりして遊んでいました。

カンガルーグループは大所帯。本物のサファリさながら何頭ものカンガルーを出して、互いに餌やりして遊ぶ・・・はずでした。ところが・・・。

「みっちゃん（仮名）の赤ちゃんカンガルーがいなくなった！」

大人カンガルーを外に出し終わったグループのみんなは、これは大変とばかりに捜し始めました。

「シマウマのおなかの中にいませんか？」

シマウマグループの側にいた先生に聞いてみました。

「いませんよ。」

「もう一回ホール捜してみる？」

りんちゃん（仮名）が言いました。みんなでホールへ行くと、みっちゃんは、カンガルー置き場を指さし、小さな声で言いました。

「ここでなくなったの・・・。」

カーテンの裏、素材箱の中、積み木の隙間など、繰り返し見て回りました。途中、ちょっと遊んでしまった男の子に、誰だったか、一人の女の子が言いました。

「カンガルーの赤ちゃんが先じゃない？」

男の子は、すぐに赤ちゃんの捜索に戻りました。

グループのみんなはあきらめずに捜しましたが。赤ちゃんカンガルーは見つかりませんでした。

とうとう、遊ぶ時間が終わってしまいました。グループのみんなは、黙ってカンガルーをホールに入れ始めました。みっちゃんが最後になりました。そこへ、きみちゃん（仮名）が近寄って来て、言いました。

「赤ちゃんを捜してあげられなくて、ごめんね。」

「大丈夫。みんなで捜してくれたから・・・。」

みっちゃんは、少しだけ元気を出してそう言いました。

この日、年長の先生たちは、友だち同士で「共通のめあて」をもって楽しく遊ぶ姿を期待していました。ところが、カンガルーグループは思わぬ事件で、遊べないままに終わってしまいました。でも、彼らには確実に「共通のめあて」がありました。「赤ちゃんカンガルーを捜し出す」というめあてです。そして、誰一人、他人事にせず、赤ちゃんを作ったみっちゃんの思いに寄り添い続け、精一杯の行動をとったのでした。しかも「赤ちゃんが無くなったから捜して！」と、先生を頼ることは一切なかったそうです。

このような主体的な子どもたちの姿を引き出したのは、一つはこの「サファリごっこ」という題材そのものの持つ魅力です。そしてもう一つは、手出しをせずに任せることのできた担任の先生の力です。ほかにもたくさんの素晴らしい姿が見えました。

因みにこのサファリごっこは昭和五十四年まで遡れるようです。

クイズ！園内のどこにあるでしょう？

ひめりんご

かりん

命を守るために できること！

四校園合同で不審者侵入を想定した避難訓練をしました。これは、お話しをしたり、みんなで考えたりしてきた「命を守る」ための訓練です。

幼稚園の時なら、先生が「助けてー！」「わー！」と声を出すことで、知らせんといあかんよ。大少よよるてはいけないという避難訓練をしました。

小学校に入ると、自分で考えて行動しなければなりません。

「いかのおすし」

いかは、「いかない」。知らない人についていかない。

のは、「のらない」。知らない人の車にのらない。

おは、「おさない」。知らない人を家に入れない。

すは、「すぐ逃げる」。危ないと思ったらすぐ逃げる。

しは、「しらせる」。何かあったらすぐ知らせる。

という合言葉で、子どもたちを守ります。

今回の訓練は、不審者が侵入したことを想定して、各教室から一番近い部屋へ逃げ込む訓練をしました。いつもと違う場所に集まるので、緊張感のある訓練ができました。